

## 実践報告

# 児童と教員の学習エンゲイジメントを高める組織開発 —同僚性を生かした持続可能な授業改善—

小川智也

愛媛県西予市立宇和町小学校 tomoya-200crown@outlook.jp

**要約:** 本研究の目的は、同僚性を生かした授業交流や伴走型授業支援、「出会い」と「振り返り」に焦点を当てた授業改善などの取組を通して、児童と教員の学習エンゲイジメントがどう変容したのかを明らかにすることである。同僚性を生かした授業交流では、交流レベルに応じてポイント化し、結果を可視化したことで、教員の意識が高まり、社会的エンゲイジメントが高まった。また、教員の課題やニーズを明らかにし、評価や授業改善のOJTを行った結果、教員の学習エンゲイジメントと教師効力感が高まった。さらに、教師効力感の低い若年教員に焦点を当て、伴走型授業支援や省察的対話を継続して行った結果、学習エンゲイジメントと教師効力感が大幅に上昇した。「出会い」と「振り返り」に焦点を当てた授業改善については、児童の意欲を数値化し、正確に見取ったことで、授業改善に生かすことができた。授業ごとの単発的・短期的な学習エンゲイジメントは高まった。

**キーワード**学習エンゲイジメント  
教師効力感  
授業交流  
伴走型授業支援  
授業改善

## 1. はじめに

近年、教員の多忙化が問題となっている。「教師は授業で勝負する」と言われているが、ベネッセ教育総合研究所の調査によると、「授業準備の時間が十分にとれない」と回答している教員が9割近くいるのが現状である。また、TALIS 2018によると、日本の小中学校教員が職能開発活動に使った時間は参加国中で最短であった。働き方改革が進められているものの、まだ時間的にも、精神的にもゆとりのない教員が多いことが伺える。そのような状況の中、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」では、「教師自身の学び（研修観）を転換し、『新たな教師の学びの姿』を実現」することが示された。教師が探究心を持ちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」が求められている。また、ベネッセ教育総合研究所の別の調査によると、近年子ども（児童・生徒）の学習意欲が低下していることも明らかになっている。このような状況において、児童と教員の学ぶ意欲を高めるにはどうすればよいのだろうか。そこで着目したのが「学習エンゲイジメント」である。本研究では、学習エンゲイジメントを高めれば、児童も教員も主体的な姿が表れ、職能成長や学力向上につながるのではないかと考え、学習エンゲイジメントが高まる取組の実践と検証を行った。

## 2. 用語の定義と先行研究

### (1) 学習エンゲイジメント（学びのエンゲイジメント）

課題に没頭して取り組んでいる心理状態で、言い換えれば、興味や楽しさを感じながら気持ちを課題に集中させ、その解決に向けて持続的に努力をしている心理状態（櫻井 2020）

## (2) 先行研究

櫻井 (2020) は、「主体的に学習に取り組む態度」と「学習エンゲイジメント」はほぼ同義であり、学習エンゲイジメントこそ教育評価の新しい時代を切り開く申し子のような概念であるとし、学習エンゲイジメントの重要性を指摘している。

学習エンゲイジメントは、興味や楽しさといったポジティブな感情を伴って取り組んでいる態度を表す「感情的エンゲイジメント」、ものごとを深く理解しよう、ハイレベルの技能を身に付けようといったような目的（意図）や目標を持ち、自分の学習活動についてきちんと計画し、モニターし、そして自己評価するような問題解決プロセスとして取り組んでいる態度を表す「認知的エンゲイジメント」、課題に注意を向け努力し粘り強く取り組んでいる態度を表す「行動的エンゲイジメント」の3つの側面から構成されている（鹿毛 2013, 櫻井 2020）。櫻井はさらにこの3つに加え、周囲の人と協力したり助け合ったりして取り組んでいる態度を表す「社会的エンゲイジメント」と「自己効力感」の5つの観点から「主体的に学習に取り組む態度」を測定・評価している。そして、この5つがうまく働くことによって、新学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」が実現され、学業成績が向上し、思考力や創造力も高まると述べている。

教員の学習意欲について、鹿毛 (2013) は、学習者の意欲を規定する重要な要因の一つは、教師の教育専門職としての学習意欲であるとし、「教師の意欲はよりよい教育実践を創りだす。そして、その実践を通して学習者の意欲的な姿が現れる。さらに、その姿に手応えを感じ取った教師はさらに優れた実践を実現しようとますます意欲的になっていく。」と述べており、教員の学習意欲が学習者の意欲に影響を与えることを指摘している。また、「自信が皆無であれば希望や見通しを持つことができず意欲的にはなれないだろう。最低限の自信が持てるということが、学習意欲が生じるための条件なのである。」と、自信と学習意欲の関係についても言及している。さらに、TALIS 2018 では、「児童生徒の自己肯定感や学習意欲を高めることに対して高い自己効力感を持つ日本の小中学校教員の割合は低い」という課題を明らかにしている。

## 3. 研究課題

研究課題1：同僚性を生かした持続可能な授業交流を行えば、教員の学習エンゲイジメントは高まるか。

研究課題2：教員の課題とニーズに合わせたOJTを行えば、教員の学習エンゲイジメントは高まるか。

研究課題3：児童の学習エンゲイジメントを高めるために、どのような取組を行えばよいのか。

## 4. 研究方法

### (1) 教員と児童の意識調査

A市の全小学校教員と3年生以上の児童を対象に、令和5年の6月と12月にGoogleフォームにて意識調査を行った（図1）。

<教員用> 全て5件法

- ・感情的エンゲイジメント 3項目
- ・認知的エンゲイジメント 4項目
- ・行動的エンゲイジメント 5項目
- ・社会的エンゲイジメント 6項目
- ・学級経営に関する自己効力感 7項目
- ・指導方法に関する自己効力感 8項目
- ・児童との関わり方に関する自己効力感 7項目
- ・基礎データ（勤務校、担当学年、性別、年齢）




図1. 意識調査の内容

## (2) 同僚性を生かした日常的な授業交流

教員の調査結果から、勤務校であるB小学校は、同僚性に関する項目の数値が低いという課題が明らかになった。そこで、B小学校の1学年複数学級である良さを生かし、同学年の担任が授業を参観し合ったり情報交換をしたりすれば、授業力が高まるとともに同僚性も高まり、学習エンゲイジメントが向上すると考え、同僚性を生かした授業交流を行った。

## (3) 教員の課題とニーズに合わせたOJT

調査結果をもとに、B小学校の教員には何が課題であり、どのような研修をしなければならないのかを明らかにした。そして、教員の意識や意欲、授業力を高めるための校内研修を5回実施した。また、今年度が採用2年目である若年教員に焦点を当て、伴走型授業支援のOJTを通して職能成長を図った。

## (4) 「出会い」と「振り返り」に焦点を当てた授業改善

児童の学習エンゲイジメントを高める取組として、授業改善に力を入れた。授業改善にも様々な方法があるが、その中でも授業の導入である「出会い」と終末の「振り返り」に焦点を当てて取り組んだ。

# 5. 分析と考察

## (1) 課題研究1について

露口(2012)は、「教師の授業力は、教師相互が授業を公開し、同僚相互で対話・協議することが規範化されている学校組織において向上する傾向が示されている。教師は同僚の授業を観察することで、さまざまな技術を学習することができる。効果的な協議を行うことで、観察者が気付かなかった視点を知覚することができる。自分の授業を公開し、忌憚のない対話・協議を行うことが当たり前のこととして定着している学校組織において、教師の授業力は高まりやすい。」と述べている。授業交流の回数が多ければ多いほど教員の授業力は向上するが、だからといって一人の教員が何度も研究授業を行うことは負担が大きく、現実的に難しい。そこで、授業交流の方法をいくつか提示し、日常的に負担なく、かつ意欲的に授業交流を行うことができるよう、ポイント制にして可視化するようにした(図2)。

<交流方法のレベルによるシールの色分けとポイント>	
授業参観による交流・・・	金シール (5ポイント)
略案をもとにした交流・・・	銀シール (4ポイント)
板書写真をもとにした交流・	赤シール (3ポイント)
言葉だけの交流・・・	青シール (2ポイント)
その他の方法での交流・・・	緑シール (1ポイント)
	※9月から実施

図2. 授業交流の方法と色分け (ポイント)

教員の主体性を発揮させるために、敢えて「その他の方法での交流」を設け、教員が自分たちでよりよい授業交流の方法を見つけ出すことを狙った。この取組は、学校組織全体で取り組んでいかなければならない。そこで重要なのが、校長の役割である。露口(2012)は、「校長がリーダーシップを発揮している状況では、専門的コミュニティが機能し、教師の授業力の向上につながっている」ことを明らかにしている。そのため、校長が取組の様子を把握できるよう、授業交流を行ったときには週案にシールを貼ることにした。シールを貼る基準は、「自分が主体かどうか」「学びや情報を提供したかどうか」の2点とし、どちらかを満たしていればシールを貼ることができることとした。

9月から11月までを調べた結果、授業交流回数、授業交流ポイントともに上昇し、授業交流が習慣化してきているのが分かる(図3, 図4)。

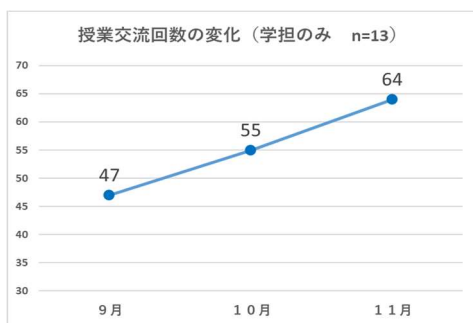


図3 . 授業交流回数の変化

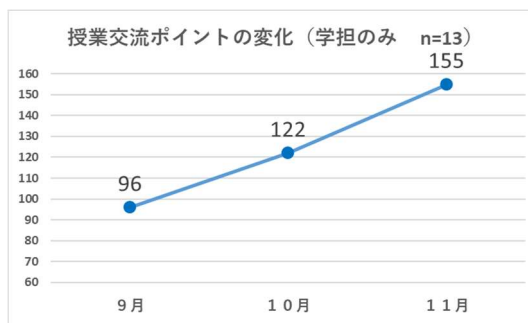


図4 . 授業交流ポイントの変化

授業交流の方法をいくつか示し、取り組みやすいものから実践するようにしたことで、教員が負担を感じることなく意欲的に授業交流が行われた。中には、学年内だけでなく異学年の教員と授業交流を行うなど、熱心に授業交流を行っている教員もいた。また、学級担任だけでなく専科の教員も授業交流を行っており、全校的な取組となっている。しかし、交流方法には大きな偏りがあった(図5)。

言葉だけの交流(青シール)は教員の負担が少ないため回数が多いが、授業参観交流(金シール)や略案交流(銀シール)、板書写真交流(赤シール)の交流になると負担が大きいためか、回数が少ない。授業交流の取組が始まってまだ3ヶ月ということで、この段階ではまずこの取組に慣れるということが大事であり、できることから地道に取り組んでいけばよいと考える。

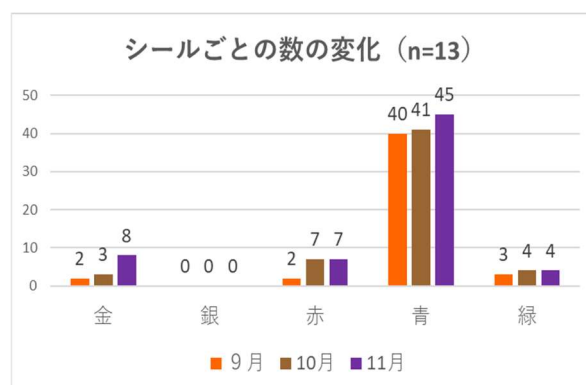


図5 . シールごとの数の変化

次に、同僚性に関する社会的エンゲイジメントがどう変化したのかを調べた。どの項目についても、肯定的な意見が増えたり否定的な意見が減ったりしており、社会的エンゲイジメントが向上したといえる(図6)。今後、授業交流の習慣が定着し、同僚性がさらに高まって効果を感じるようになれば、学習エンゲイジメントや教師効力感が高まるとともに、レベルが高い授業交流も増え、授業力の向上につながるだろう。

## (2) 課題研究2について

研究を進めていくうえで何よりも大事なことは、B小学校の教員に研究についての理解を得て、研修に対する意識と意欲を高めることである。それができていない状態で様々な取組を行っても、教員の学習エンゲイジメントの向上は期待できない。そのため、5月に行った校内研修では、今のB小学校の実態や課題、そして研修の必要性や今後研修で何を深めていかなければならないのかについて確認し、全職員が組織としてまとまって取り組んでいくことの必要性を共通理解した。

同僚性以外の課題として、教員の調査結果から、評価についての数値が低いということが明らかになった。「指導と評価の一体化」とよく言われているが、評価がしっかりできていないと授業改善につながらない。児童の学習エンゲイジメントを高め、質の高い授業を行うためにも、評価の研修は急務である。そのため、校内研修で評価についての基本的な考え方や評価計画の立て方、具体的な評価方法等を研修した。

6月と12月で評価に関する項目の変化を調べてみると、どれも上昇していた(図7)。

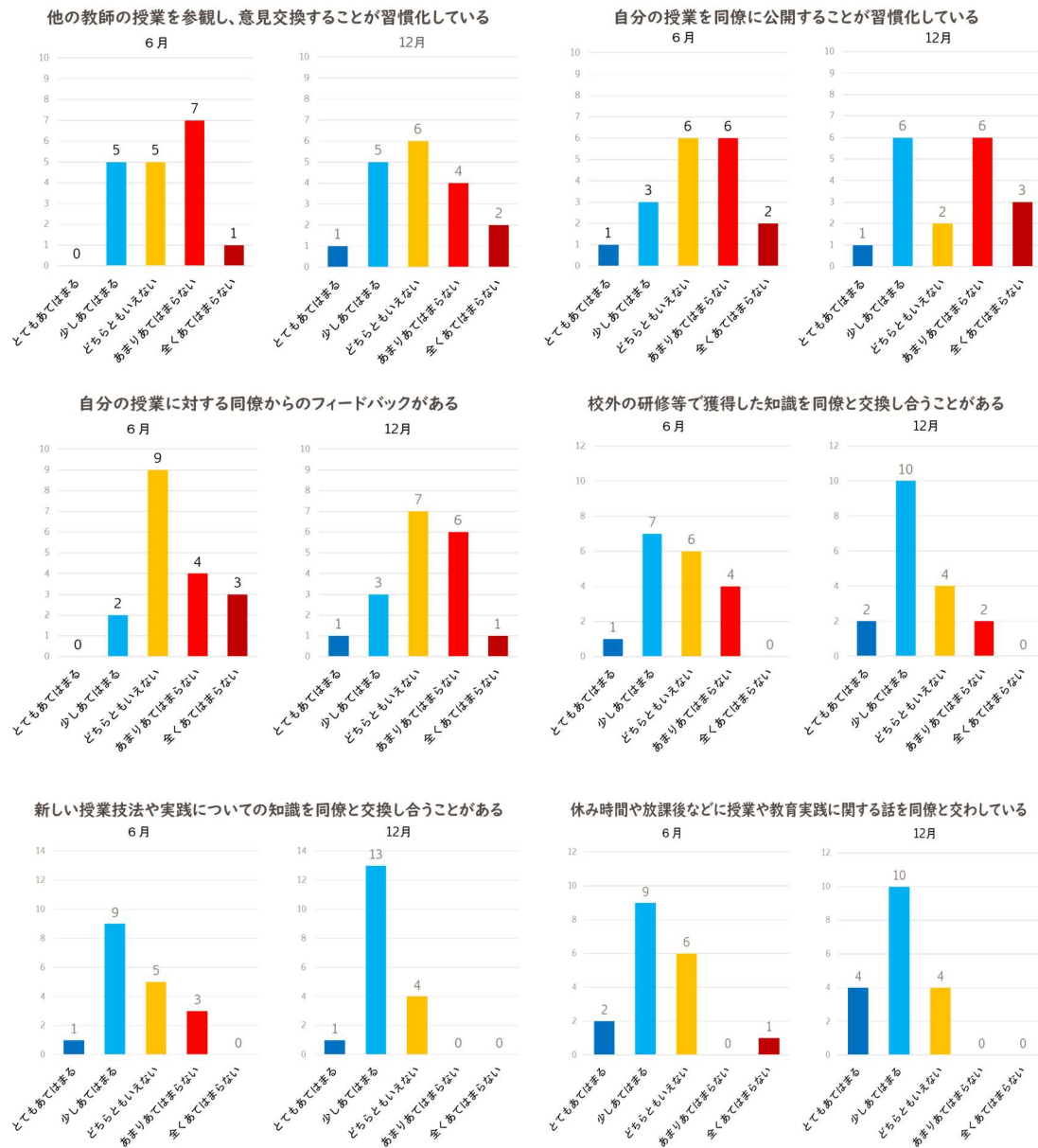


図6．社会的エンゲイジメントの変化

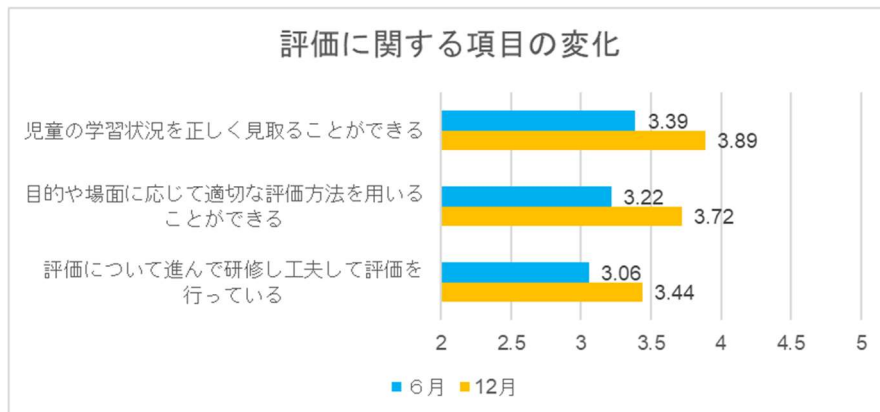


図7．評価に関する項目の変化

しかし、他の項目に比べると依然数値は低く、評価についての研修がまだ十分であるとはいえない。今回は算数科に焦点を当てて行ったが、今後は他教科においても、具体的な事例を基に評価の研修を進めていかなければならない。ただ、校内研修の時間は限られており、内容は他にも予定されているため、評価の研修を何度も行うことは難しい。そのため、校内研修以外の時間をいかに効果的に使うかがポイントとなる。日常的な授業交流の中で評価についての情報交換が積極的に行われるようになれば、この項目についてもさらに高まるであろう。

その他にも、教員の授業力を高めるために、授業改善の校内研修を行った。内容については研究課題3 と重なるため、詳しくは研究課題3 で述べる。

授業交流やOJ Tなどの取組を通して、学習エンゲイジメントと教師効力感がどのように変化したかを調べたところ、学習エンゲイジメント、教師効力感ともに上昇していた(図8, 図9)。学習エンゲイジメントで特に大きく上昇していたのが、図10の項目である。校内研修で意識が高まり、知識も身に付いたことで、学習エンゲイジメントが高まったと考えられる。

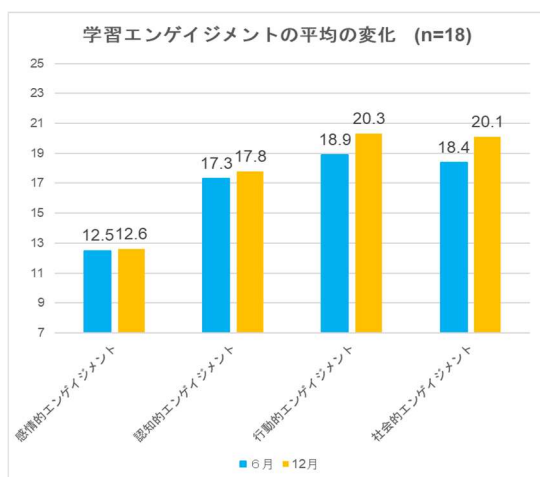


図8. 教員の学習エンゲイジメントの変化

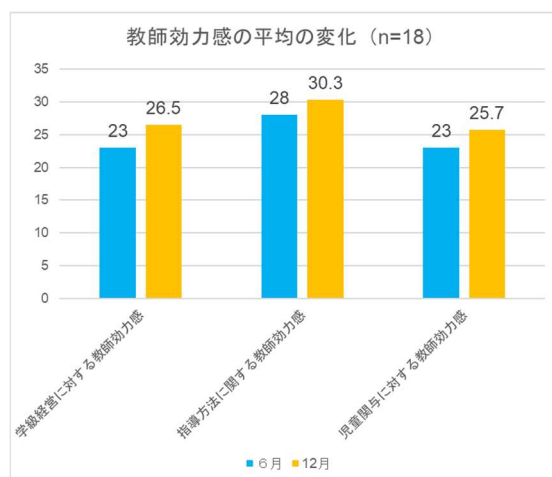


図9. 教師効力感の変化

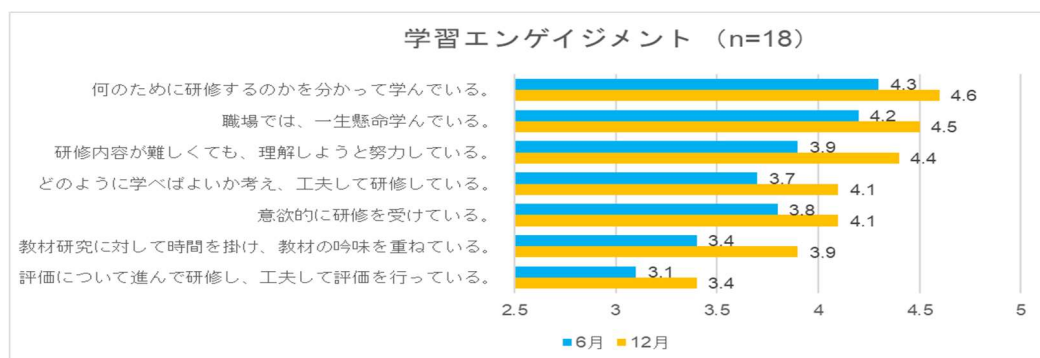


図10. 学習エンゲイジメントで大きく上昇した項目

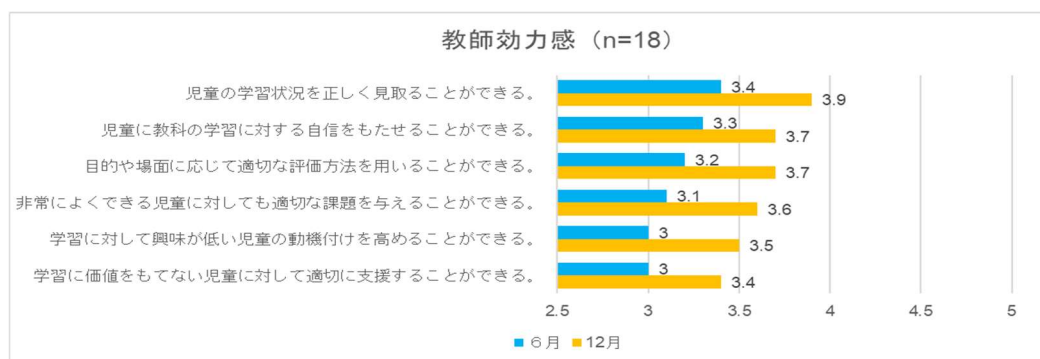


図 11. 教師効力感で大きく上昇した項目

教師効力感についても、大きく上昇した項目があった（図 11）。教員の課題やニーズに合わせた研修を行ったことで、即実践に生かすことができ、その効果を教員が実感して自信につながったと考える。

同僚性、評価の次に課題となったのは、若年教員の育成である。B 小学校には教職2 年目の教員（C 教諭）がいる。初任者であった昨年度は校内でも研修体制やサポート体制が組まれていたため、育成の面ではよい環境であった。しかし、今年度は昨年度のような環境ではなくなるため、この1 年をどう過ごすかが、C 教諭の成長を大きく左右する。

6 月の調査では、特別支援学級や専科を含む教員 22 名のうち、C 教諭の教師効力感が一番低かった。そのため、図 12 のような伴走型授業支援の OJ T を行い、学習エンゲイジメントと教師効力感の向上を図った。

- ・毎週算数の授業を参観し、省察的対話を行う。
- ・教材研究の際にアドバイスをを行う。
- ・先輩教員の授業を一緒に参観し、省察的対話を行う。（伴走型授業参観）
- ・2 年目の教員が初任者の後輩に師範授業を行う。

図 12. 若年教員育成のための取組

取組の結果、学習エンゲイジメントと自己効力感が大幅に上昇した（図 13、図 14、図 15）。

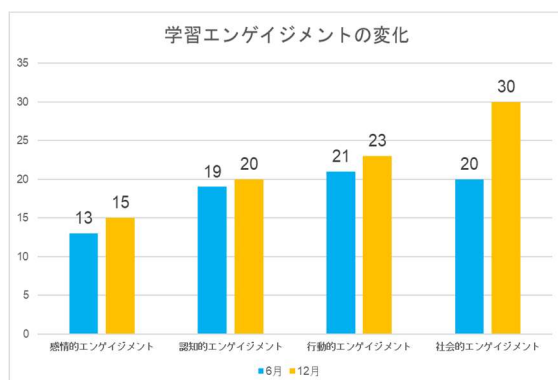


図 13. 学習エンゲイジメントの変化

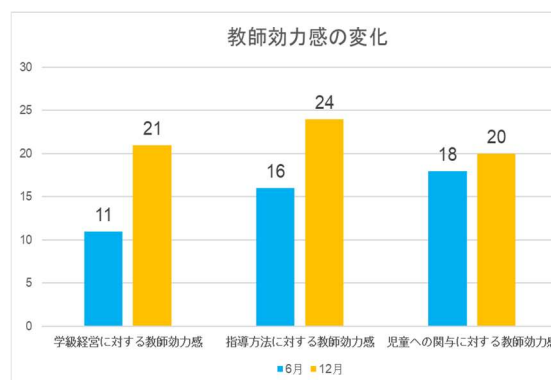


図 14. 教師効力感の変化

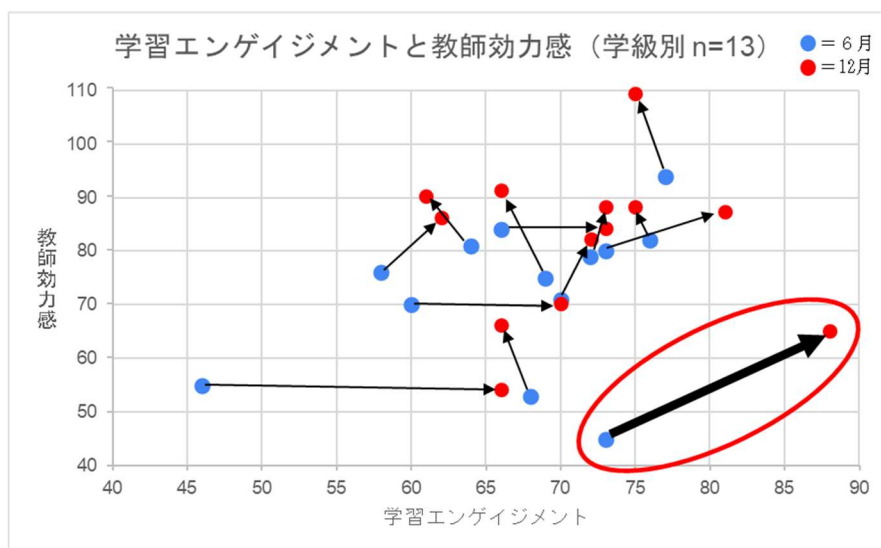


図 15. C 教諭の学習エンゲイジメントと教師効力感の変化

授業改善の視点を焦点化して取り組み、ベテラン教員が伴走者として丁寧に教材の価値やおもしろさ、授業のポイントを示したり、実践的指導力の向上がみられたところを称揚して自信を持たせたりしたことが効果的であったと考える。初任者に対して師範授業を行う取組では、自分のこれまでの学びを初任者に伝えたいと、意欲的に教材研究や準備を行い、生き生きと授業を行った。初任者に対してだけでなく、C 教諭にもよい刺激になった。C 教諭は、進んで書籍を読んで自主研修を行ったり、自分から積極的に先輩教員にアドバイスを求めたりするなど、学習エンゲイジメントの高まりが感じられる姿がたくさん見られた。単元末テストで児童の到達度が高く、指導の効果が表れたときには、「算数の授業をするのが楽しい」「これからも算数を研究したい」と意欲の高まりを示した。

### (3) 課題研究 3 について

授業で児童の学習エンゲイジメントを高めるためには、導入で題材との「出会い」を工夫し、児童の興味・関心を高めることが大事であると考えた。そのためには、まず教員が教材研究で題材（内容）の価値をしっかりと把握しなければならない。価値が把握できていない状態で題材を工夫しても、「児童の興味・関心は高まったが、学習のねらいに迫ることができなかった」ということになる恐れがあり、それでは全く意味がない。また、題材を工夫しただけでは不十分である。児童の意欲が高まり、より主体的に学習に取り組むような仕掛けを施したり、児童が悩んだり、驚いたりするような心が動く工夫をしなければならない。児童の興味・関心を高めるために、クイズやゲームを取り入れることがあるが、授業後、児童の頭の中に「クイズやゲームが楽しかった」という意識しか残っていなかったのでは、学習にはならない。目指すべきは、「ゲームやクイズを通して〇〇のことがよく分かった。〇〇に気付くことができて楽しかった。」という学びである。つまり、児童が表面的な楽しさではなく、教科の本質に迫る楽しさを味わうことができたかどうかが重要である。したがって、教員は「児童の興味・関心を高める」ということ以上に、「授業の目標に直結する、価値がある『出会い』となっているか」ということを意識しておかなければならない。

「出会い」とともに重要なのが、「振り返り」である。「振り返り」は、本時の学びを価値付け、意欲を次の時間へつなげる大事な役割がある。そこで、「出会い」と「振り返り」の重要性を今一度全教員で共通理解するために、8月の校内研修で授業改善についての研修を行った。「出会い」や「振り返り」の意義やポイント（図 16）だけでなく、算数科の授業における「出会い」と「振り返り」の工夫の仕方について、いくつかの事例をもとに提案した。



- ・本時での学びを価値付けるものとなっているか。
- ・振り返りの視点を与えているか。ただ感想を書かせる（発表させる）だけになっていないか。
- ・書かせたものについて、フィードバックをしているか。
- ・次の時間へ意欲をつなげる（高める）ものとなっているか。
- ・ときには自己評価の場としても利用しているか。
- ・教員の見取りに生かしているか。

図 16. 「振り返り」のポイント

10月と11月の校内研修では、8月の研修を受けてそれぞれの教員が2学期にどのような取組を行ったかを紹介合った。情報を共有したことで、様々な方法で実践を行うことができるようになった。

「出会い」を工夫した取組を行っていくうえで大切なのは、効果があったかどうかを検証するということである。授業者が主観で「児童が意欲的・主体的になった」と判断しただけでは不十分であり、自己満足で終わってしまう危険性がある。そこで、「出会い」の工夫が効果的であったかどうかを検証するため、児童の意欲を「やる気度」として5段階で数値化させた(図17)。

そうすることにより、児童の意欲を正確に見取ることができ、授業改善に生かすことができた。しかし、児童の学習エンゲイジメントの変化は学級間で差があり、取組の効果は検証できなかった。その理由として考えられるのは、教員によって取組状況に差があったということである。そしてもう一つは、児童の意識と学力である。算数に対して根強い苦手意識を持っている児童や、ある程度の学力が身に付いていない児童にとっては、学習エンゲイジメントは高まりにくいことが考えられる。児童の学習エンゲイジメントを高めるには、導入で意欲を高めるだけでなく、児童の実感を伴った学びを保障する教員の授業力が必要である。ただ、授業ごとの単発的・短期的な学習エンゲイジメントは高めることができているため、この取組を継続して行っていくことが、長期的な学習エンゲイジメントを高めることにつながっていくと考える。

名前	割合①	割合②	割合③	名前	分数①	分数②	分数③	分数④
	1	2	2		2	4	3	2
	1	1	1		2	3	4	2
	3	1	3		2	2	2	3
	欠	3	3		欠	欠	欠	欠
	5	5	5		5	4	5	5
	4	3	4		3	3	5	4
	2	2	4		3	4	4	4
	3	1	4		4	4	4	4
	1	3	4		欠	欠	4	3
	欠	2	欠		4	4	4	3
	5	1	3		4	3	5	5
	5	5	5		2	3	3	4
	5	5	5		3	3	4	4
	3	1	3		5	5	5	5
	4	5	5		2	2	3	3
	5	5	5		3	2	2	4
	3	4	3		2	2	3	2
	3	2	4		3	3	3	3
	5	4	5		2	2	2	2
	1	1	1		4	5	5	3
	1	2	4		3	3	3	3
	5	4	3		3	4	5	5
	3	2	4		3	4	5	4
	3	4	5		4	欠	4	5

図 17. 「やる気度」チェック (5年生)

## 6. 実践的示唆

### (1) 学年で話し合う時間の確保

B小学校では、放課後の課外活動に多くの教員が関わっているため、授業交流の時間が確保しにくい。そのため、教務主任を中心として学年で授業の空き時間が合うように時間割を組んだり、放課後に「交流タイム」を設定するよう日程を調整したりすれば、そこで授業についての話し合いを行うことができると考える。

### (2) 若年教員育成のための伴走型授業支援体制の構築

本研究で、若年教員に伴走型授業支援などのOJTを行えば、学習エンゲイジメントと教師効力感により影響を与えることが明確になったため、来年度以降も継続して若年教員の育成環境を充実させる必要がある。所属の学年主任だけに頼るのでなく、教頭や主幹教諭を中心に他の教員も意図的・計画的に関わるなど、組織を挙げた校内支援体制を構築することが重要である。

### (3) 研修主任の相互交流を基盤とした市内研修体制の構築

A市内各小学校の研修主任にアンケートを行ったところ、「研修内容をどうすればよいか悩んでいる」と回答した学校が複数校あった。また、中には「教員の意識に差があり、取組が思うように進んでいない」という学校もあり、様々な苦勞を抱えていることが明らかになった。さらに、A市内各小学校教員の学習エンゲイジメントと教師効力感を調査したところ、学校によって大きな差があることも明らかになった(図18、図19)。

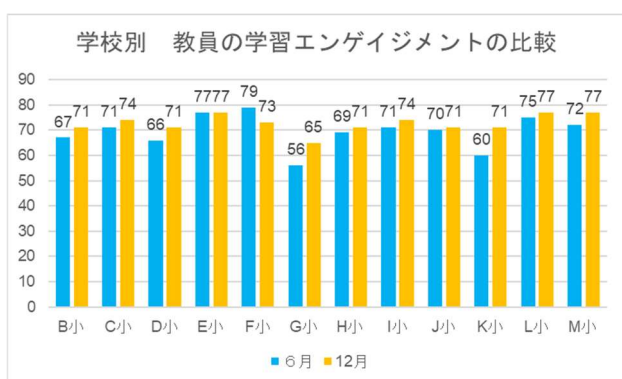


図18. 学校別 教員の学習エンゲイジメント

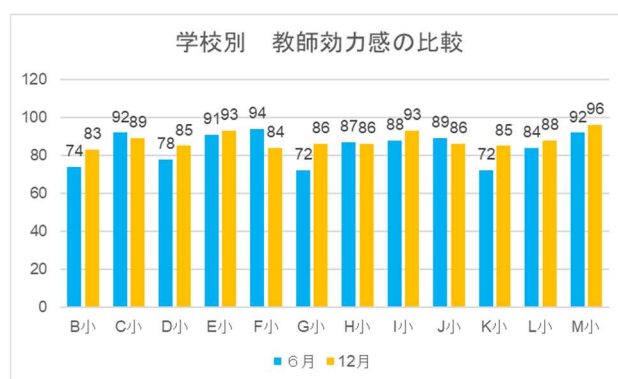


図19. 学校別 教師効力感

これらの課題を解決するためには、まず研修主任同士の横のつながりをつくる必要があると考える。定期的に情報交換を行ったり、ともに研修したりするような場を設定し、研修主任同士のつながりを深め、力を高め合うことができれば、各校の研修がより充実したものになるであろう。また、ときには他校の校内研修に参加したり、他校と合同で研修を行ったりするなど、学校の枠を超えた交流も効果的であると考え。A市教育委員会が主体となり、学校間で連携しながら取り組んでいけば、A市全教員の職能成長や児童・生徒の学力向上につながるのではないだろうか。さらには、研修主任だけではなく、校長もともに研修について考えることができるよう、校長・研修主任合同研修会の開催も併せて必要であると考え。

### (4) 児童の学習エンゲイジメントと学力の関係

5年生以上の児童を対象に、6月に調査した学習エンゲイジメントと1学期算数テストの到達度との関係を調べてみた(図20)。すると、学習エンゲイジメントは高いものの到達度が低い児童や、学習エンゲイジメントは低いものの到達度が高い児童がいることが分かった。この実態をもとに、日々授業改善に取り組んでいかなければならない。

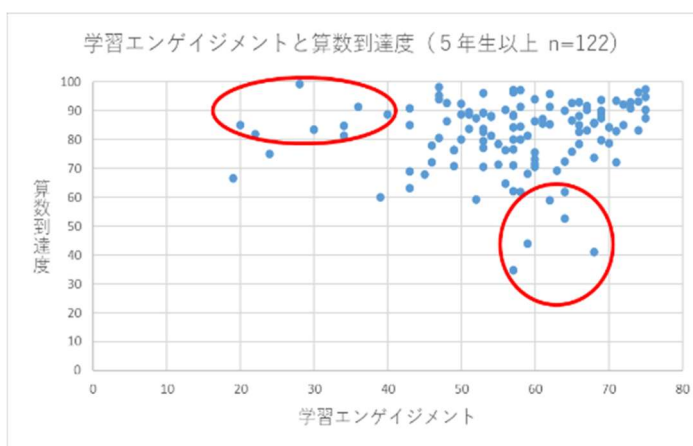


図20. 算数到達度と学習エンゲイジメント

今回の研究では、児童の学習エンゲイジメントと学力の相関までは詳しく検証できなかったが、今後は、学習エンゲイジメントが高まる取組を継続して行っていくことで、児童の学力にどのような影響が出るのかを検証することが求められる。そのためには、学力テスト等を活用し、経年変化を追っていきながら検証していく必要がある。

## 7. 今後の課題

### (1) 授業交流の内容について

日常的な授業交流を中心に授業改善に取り組んできたが、その方法には偏りがあった。一番取り組みやすい「言葉での交流」が多く行われていたものの、どのくらい時間をかけて、どのような視点で話をしたかというその内容については把握していない。交流をより充実したものにするためには、学年主任の役割が重要である。学年主任がリーダーシップを発揮し、積極的にコミュニケーションをとり、より質の高い授業交流を目指して取り組んでいくことが望ましい。また、言葉だけの交流では、授業力は高まりにくい。やはり、授業を実際に見て、教員の雰囲気づくりや何気ない言動、問い返し、話し方、そして児童の実際の姿を直接見た方が、学びは多い。今後は、学年主任だけでなく、研修主任や学力向上推進主任、管理職の役割を明確にし、質の高い授業交流が組織として日常的に行われるようにしたい。

### (2) 取組の教員間格差について

授業の「出会い」と「振り返り」に焦点を当てて授業改善に取り組んできたが、回数の確認は行っていない。授業交流回数に加えて授業改善の回数も調べるようにすると教員の負担が増えてしまう。また、ノルマを設定すると学習エンゲイジメントが低下し、教員の主体性は育たない。これらのことに配慮し、教員の主体性に任せて自由に取り組むようにしたが、時間的・精神的なゆとりがなく、十分に組み立てていない教員がいた。忙しい中での教員の意識を変えることは難しいが、まずは実践することでその後に学習エンゲイジメントが高まることもあるため、今後も継続して取り組んでいかなければならない。

### (3) 教員の時間的なゆとりを生み出す環境整備

今の校内体制では人員が不足しているため、教員の時間的なゆとりを生み出すことが難しい。外部人材を取り入れたり、加配教員を増員したりして、教員に時間的・精神的なゆとりができる環境の整備が求められる。

## 謝辞

調査にご協力いただいたA市内各小中学校の皆様は心よりお礼申し上げます。また、本研究の実施にあたり、ご承諾いただいた研究協力校の校長先生をはじめ、調査・研究にご協力いただいた先生方に厚くお礼申し上げます。最後に、露口健司先生、高橋葉子先生には多大なご指導、ご助言をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 鹿毛雅治 (2013). 学習意欲の理論 動機づけの教育心理学 金子書房
- 久坂哲也・中嶋彩華 (2018). 小学校教員の教師効力感と教員経験年数の関連の予備的検討 日本教育工学会論文誌, 42, 57-60.
- 櫻井茂男 (2020). 学びの「エンゲイジメント」 図書文化
- 露口健司(2012). 学校組織の信頼 大学教育出版
- 露口健司(2016). 「つながり」を深め子どもの成長を促す教育学 ミネルヴァ書房
- 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 共同研究プロジェクト (2021). 子どもの生活と学びに関する親子調査 2021 <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=5703> (最終アクセス日 2024年1月19日)
- ベネッセ教育総合研究所(2022). 小中高校の学習指導に関する調査 2022

<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5812> (最終アクセス日 2024 年1 月 19 日)

文部科学省中央教育審議会(2015).これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）

文部科学省 TALIS（OECD 国際教員指導環境調査 2018）

文部科学省中央教育審議会(2022).「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と，多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～